県日伊協会副会長
レオ・ベリーニさんを悼む

本当のイタリア 伝えようと奔走

「ナガノと世界つなぐひとたち」（二〇〇二年十一月十二日夕刊掲載）で紹介した、イタリア人で県日伊協会副会長のレオ・ベリーニさんが今月一日、病気で亡くなった。四十三歳。自ら告知を受け、最期の場に日本を選んだ。レオさんが熱意を傾けた協会は発足してまだ二年足らずで、「やり残したことはいっぱいあるのに」と、惜しむ声が広がっている。

レオさんは、ローマで知り合った緑さんとの結婚を機に、一九九一年一月に来日。緑さんの実家が営む北安曇郡白馬村のペンションでシェフをしながら、松本市などでイタリア語の講師を務めた。二〇〇一年九月に発足した県日伊協会では、大使館の人脈も生かして助言するなど核になる存在だった。

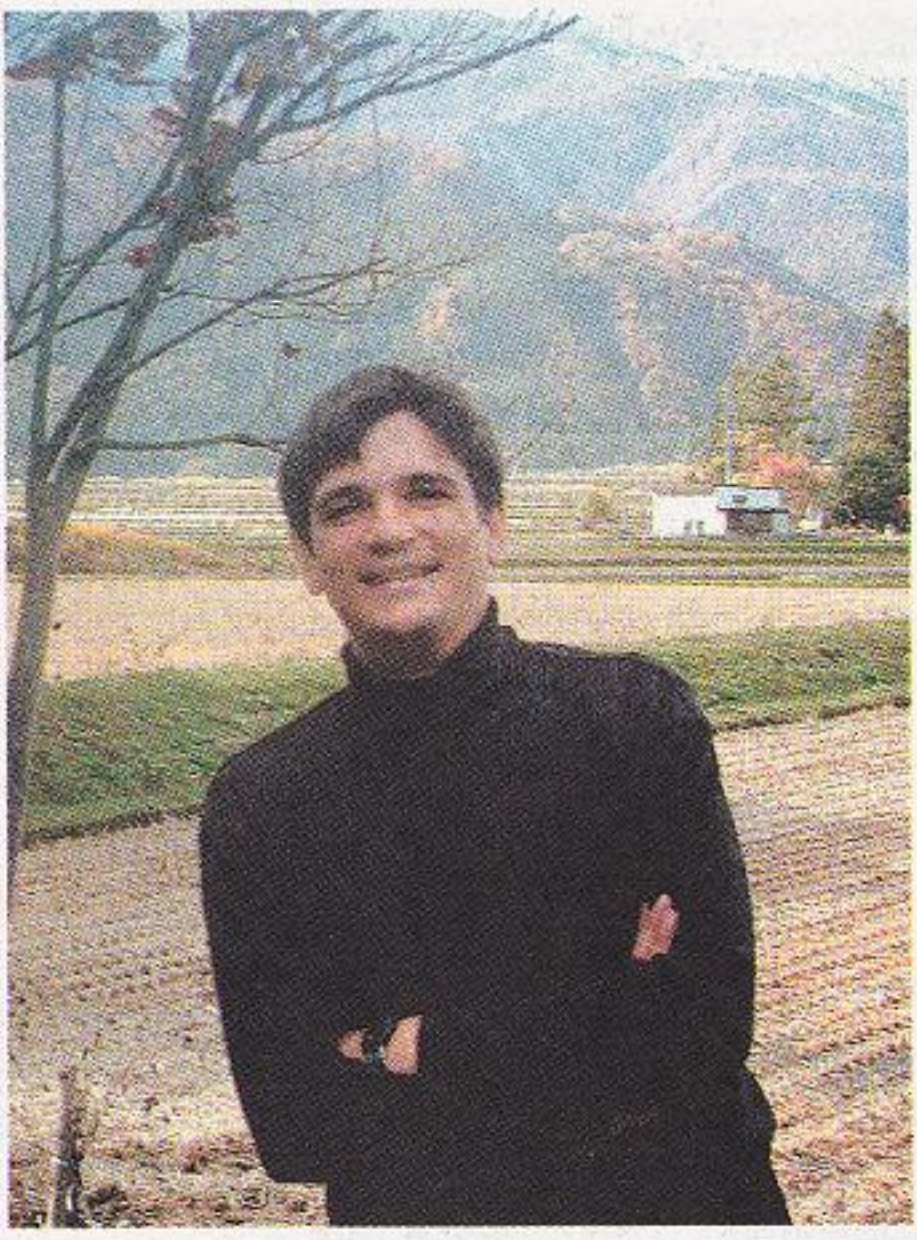
「みんなの意見を尊重し、いつも一生懸命で丁寧に教えてくれた」と、語学講座の受講生たち。親しい友人は「自分のことより、いつも相手の気持を考えていた。日本人より日本人らしいイタリア人」と話す。確かに、多くの欧米人と違って、自己PRは苦手だが、周りに配慮が行き届く繊細な人だったと思う。

一方で、生前、「長野は人と触れ合いの場が十分でない」と、日本の地域社会に溶け込む難しさをたびたび口にしていた。だからこそ、協会の活動にも力が入ったのだろう。誰にも知らせなかった闘病の中で、イタリア映画の定期上映会の企画も温めていた。

スイスで受けた自然治癒力を高める治療が一段落したとき、レオさんは、母国イタリアでの療養を勧められたが、「日本に帰りたい」と断ったという。彼はそこまで日本や長野を愛していたのだ。カトリックの信者だが、遺骨は、ペンションの近くの緑さんの実家の菩提寺に納められる予定だ。

「レオさんを名誉会長にして、その名前を永遠に残したい」と、県日伊協会長の渡辺千洋さん。「真の交流で本当のイタリアを伝えたい」とのレオさんの思いは、みんなの心のより所となってずっと生き続けるに違いない。レオさん、グラッチェ。

（シルビー・ジャコ本紙特約記者）



レオ・ベリーニさん＝2002年10月22日、北安曇郡白馬村